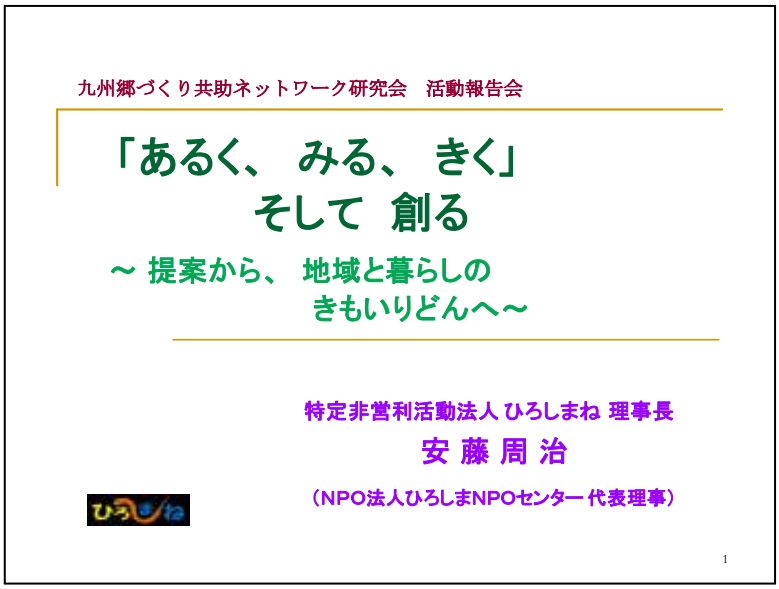
第２部　講演・現地報告（２）

講演　　「あるく、みる、きく」 そして 創る

～ 提案から、地域と暮らしのきもいりどんへ～

NPO 法人ひろしまね　安藤　周治



② 講演　「あるく、みる、きく」 そして 創る
～ 提案から、地域と暮らしのきもいりどんへ～　（NPO 法人ひろしまね　安藤周治）

皆さんこんにちは、広島から来ました安藤です。

少しの時間ですが、おしゃべりをさせて頂きます。

今日お配りしています資料は、参考にと思い色々と取り込んで作ってきましたので、全部話すという事には参りません。必要な所だけ見て頂き、後程、参考になれば使って頂ければと思います。

◆３年前の視察報告書を、処分していませんか

私は、皆さんが３年前に来られた際に、既に「この会」が立ち上がっているのかと思っていましたが、立ち上げ前に、我々の“ひろしまね”広島県と島根県の県境においで頂いたということです。

また、その当時に立派な報告書をお作りになっていますが、３年前なので会員の方々では、ひょっとしたらもう処分されているのでは。勿体ないと思うのですね。

コンサルさんもそうですが、役所の調査報告書はいっぱいできていますが、１年毎にばっさばっさと捨てられる。我々民間の地域で活動をやっている人間から見ると、勿体ない話だなぁと思うんですよね。随分お金を掛けて、中身の濃い資料がいっぱいあるのですが、それが殆どそのまま処理されていますよね。再利用の資源になっているとしても、ちょっと勿体ないと思っています。

是非もう一度、書庫をみて頂いて、我々の所に来て頂いた際の視察旅行報告書を見て頂きたいと思います。

◆「あるく、みる、きく」とは

今日は、「あるく、みる、きく、そして創る」と題目で、出させて頂きました。

実はこれは、宮本常一さん、「著作集」も出ているのでお読みになっている方もあるかと思いますが、日本列島じゅうをよく歩いておられます。九州の対馬、長崎あたりは何度も行かれレポートもあります。その人が近畿日本ツーリストのお手伝いをされる時、「あるく、みる、きく」というタイトルで雑誌を作られました。

我々も、まちづくりや地域づくりをやって行くのに、一番身近な学問とは何だろうか。現場に立って、現地の人に話しを聞く、特にお年寄りに聞いて行く中で、我々の活動の方向性が見えてくるだろうという事を思いながら、現在もその民俗学の勉強会をやっています。

そういった所の話しを少しさせて頂きたいのと、本日の「新しい建設コンサルタントの方向」というのは、多分、“肝いり”の役目ではないかという事でサブタイトルまで付けました。

◆江の川流域のブッポウソウとビジネス化

我々の活動エリアの中国地方と言うと、九州の皆さんはすぐピンとこられると思いますが、東の方では、鳥取県は、島根県はどこにあるのか、それが分からないということが結構あるみたいです。

我々の活動エリアには江の川があり、その流域で活動をやっています。私の住んでいる所は、自然環境が良くブッポウソウの生育に適しており、その保護活動が盛んです。NTT さんも協力的で「巣箱」を立てるのに特別な許可を出して巣を作っています。現在は孵化して子供達が生まれ、給餌をしています。

実は、来年度全国大会でシンポジウムを開こうと準備中です。この保護活動もビジネスにできないか、という様なこともこれからのテーマにと考えています。

多分、皆様もそれぞれのプロジェクトを行い、地域に入って行く中で、地域の人たちがどうやって自分の生活をして行くのか、それもお金の当てを少し期待しながら、ということを日々感じておられると思います。

◆江の川流域会議から「ひろしまね」、そして「口羽を手ごぅする会」へ

我々の活動はざっとこんな状況です。今から 40 年程前からまちづくりや地域づくりに関わってきました。

九州でも台風、水害が発生して大変だったと思いますが、その水害を出発点として江の川流域会議を設立しました。そして同じような形で、地域づくりを中国地方全体でやり始め、その後はまちづくりや地域づくりの動きがどんどん活発になってきたという事です。

今日の話しの中心は、2000 年頃からの動きです。我々の NPO 法人「ひろしまね」、そして 2008 年にまちづくり株式会社「わかたの村」ができ、活動・営業も順調に進んで収益もちょっとあがるかなぁという時に、皆さんが視察にみえました。

ところが今は、株式会社を解散して、次の展開として NPO 法人「元気むらさくぎ」に姿を変えています。我々「ひろしまね」というのも、言うばかりではダメなので、現場で実際に実績を上げて行こうという事で、この「元気むらさくぎ」もその１つです。

もう１つ別のグループが LLP（有限責任事業組合）で、「口羽を手ごうする（お手伝いをする）会」を立ち上げて活動しています。

我々の「ひろしまね」は色々な場面で活動しています。これは広島のあるコンサル会社の皆様と江の川流域の社会資本整備に関する会議の場面です。これは、最上流から最下流まで 130 ㎞ある江の川をどうするか、そういう流域の活動家の勉強会を逐次開いているという場面です。

これは、地域の物産を広島市内のイタリア料理店に直販できないかという事で、市内 30 店舗の皆様に来て頂きました。少量生産で量が纏まるわけでもないので、そういう農産物を届けるという事で今も何軒か品物をやりとりしています。イタリア料理店のシェフの皆さんは、結構、癖のある方々ですから、“少量で入って来たものをどう料理するかで、私は商売をする”みたいな事を言ってくれています。農家の皆さんも気楽にとやりとりをしている。多分、町と村の交流事業の中で物産を兼ねる場合は、ルートというのは大事だと思います。

冒頭にお話した、宮本常一に従いながら勉強会をやるということで、月に１回の例会で「我聞塾」をやっており９年目に入りました。これは、赤い朱塗りの祝い膳を元に考えながら、食について考えるという例会の場面です。実際に、年に 1、2 回は宮本常一の足跡を学ぶという事で、旅行に出掛けたりもしています。

そして変わった所では、「花札から学ぶ地域づくり」という勉強会もやっています。いかにオイチョカブで儲けるかという話ではないのですが、「花札」から何が語れるか。日本の花鳥風月が「花札」の中に殆どといって良い程入っている。その１枚１枚を捲りながら、何が語っていけるか。これは、その人の力量で、知識がある、感性がある、というのでないと２～３分しか喋れません。

◆「もうひとつの役場」について

これが中国山地の風景で、視察の際にご案内した所です。“天国に一番近い集落”と地元の人が言っている所で、私としてお薦めの場所の１つでもあります。今は、地元の方々が植えた花が５年目になって 300 本程、見事に咲いており、今年から花祭りをやっています。

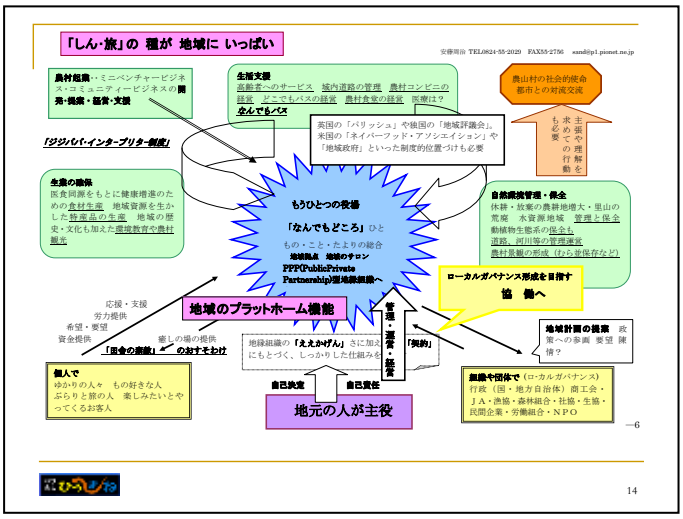
この地形は、和鉄の生産をやった固有の地形と言われています。その集落のすぐ近くに、こんな碑が立っています。ここにあった集落は全戸他出で完全に消滅しました。

これは心を痛む図でして、九州には無いですかね、お寺の本堂の屋根が抜けているんです。

今、集落はこんな状況になりつつある。これは、過疎問題が起きた 40 年前とは確実に違うということが、この１枚で説明がつくのではないかと思います。集落全体の力が無くなって来ている、その証しでもある。集落の拠り所だったお寺、建てる時もメンテナンスも地域の人がおやりになっていたのですが、人が住まず高齢になったとか、建て替えも出来ないという状況がこういう姿になっている。

そんな状況の中で、もう１つの役場というのがいるのではないか、集落を切盛りしていく集団というのが

いるのではないか、というのが「もう１つの役場」の提案なわけです。これは今でいえば、地域のプラットホームの機能をもっている拠点という事にもなろうかと思います。



かつて、市町村合併の前までは、町役場、村役場がその機能をもっていました。ところが、それが無い。それに加えて今、残念ながら公民館が無くなってきている。（九州の場合は、公民館が残っており、宗像あたりでは地域コミュニティ活動が盛んですが）今は、コミュニティーセンターやまちづくりセンターへ鞍替えして、教育委員会から手が離れ市長、町長、村長さんの部局の管理になってきている。そこで管理する事で、地元の指定管理となっており、大人の教育の場面が無くなってきている。かつての公民館機能が、薄れてきているというのが、１つ危惧する所です。

改めて、今流の地域のプラットホームが必要なんだなぁと。一昔前は、床屋さんだったかも、居酒屋さんだったかもしれません。そういったものが、かなり少なくなってきている。

そういう拠点をプロデュースしながら、この周辺の事業の展開ができないのだろうかという事で、図柄を描いてきました。

もう一つの役場&集落支援センター 業務の概要図 200803

地域住民サロン機能 山村コンビニ 喫茶・食堂 共同浴場 冬季共同生活所 災害時避難生活所	**高齢世帯支援機能** 家・庭・墓管理代行 役務・共同作業代行 送迎・買い物代行 声がけ・危機管理代行 冬季の除雪支援	**里山保全管理機能** 農地管理・貸借斡旋 森林管理・貸借斡旋 古民家管理・貸借斡旋 監視員による点検活動 親戚縁組・疎開提携
交流訪問者受付機能 交流体験事業遂行 農家民泊斡旋 ファン倶楽部運営 出身者の会運営 地域ＨＰ運営	**総合事務局機能** センター経営事務局長 地域調整担当者 農村体験案内指導者 受付担当事務員	**産直運営機能** 特産加工場管理 高齢者生産活動推進 こだわり食材集荷発送 有害鳥獣対策支援
役場・金融・連絡機能 役場事務代行 郵便局事務代行 金融機関代理店 公民館活動代行 地域公用車・バス運行	**人材登録派遣機能** 人材受入派遣 伝承者・技能者登録派遣 地域出身者登録帰農支援 Ｉターン希望者登録支援 学生・都市市民登録支援	**宿泊研修機能** 各種団体宿泊研修事業 体験指導者養成 同窓会開催企画 農村体験希望者の合宿所

「もう一つの役場」資料 NPO 法人ひろしまね
15

そして、具体的にはこういう事業です。役場の機能、まさに総合事務局機能ですから、様々な地域の機能を果たすというのが、一番大きい仕事になろうかと思います。

現に、先程みて頂いた「口羽の手ごぅする会」が実施していることですが、農林省の仕事である「直接支払い制度」が、手間暇かかる面倒くさい仕事になっているので集落では処理しきれない。そんな事をこの総合事務局機能というのが処理できないか。少し農地面積があれば、１人の雇用が生まれるぐらいのお金が出てくる、という事もある。今、手ごぅをする会は、３箇所の直接支払い制度の事業を受けて事務処理をやってきている。

さらに、周辺を見回して頂くと、宿泊・研修機能で民泊、グリーンツーリズムのようなものを。産直機能というのは、先程のイタリア料理店へというのがあります。そんなこだわり食材の集荷と発送ができないか。

その集荷は大変ですよね。この集荷と高齢者の支援機能という中で、送迎や買物代行、移動のお手伝いをするという事で、何でも運べるバスというのが機能できないか。今、日本の法律でいうと、人を運ぶ法律と物を運ぶ法律は別々です。“一緒に運ぶことは、相成らん！”と陸運局の方針ではそうなっています。何でも運べる仕組みというのが出来ないかというのが、我々の提案でもあります。では、ちょっと言葉を変えて、婆ちゃんが乗って、その手荷物で農産物を外地に持って行くというのはどうか。少し、法律の壁、風穴をあけてみようということをやっている。

そんな事も含めて、「もう１つの役場・集落支援センター」の機能を図柄で示しております。（このデータを本日の事務局においています。パワーポイントのデータが必要であれば、コピーを持ち帰って利用して頂いて結構です。）

◆「肝入りどん」が要る

市町村合併が、随分広がっています。その結果、区域が広がっているのですが、職員が格段に少なくなっている。その為に市町村合併したというのですから当然ですが、地域の分からない職員さんが増えている。緊急災害時、先日の大雨の時などは大変だったと思います。役所に電話が入っても、大字名を言われても、

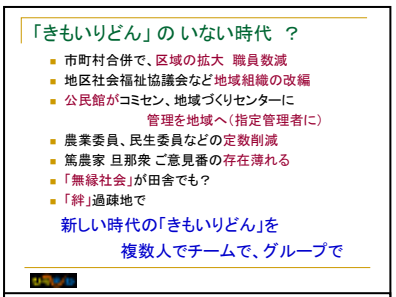
担当者がわからない。即対応というのは出来ないという場面も想定できる。

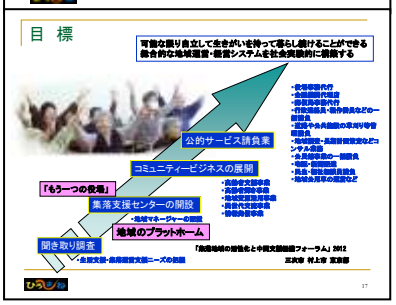
そして、地域の組織としてあった社会福祉協会も合併で随分改変されてきている。公民館の話、農業委員さんや民生委員さんの定数もどんどん減ってきている。これも合理化されている途中です。

我々民間のサイドでも、こういった方々の存在感が薄れると同時に数が少なくなってきているという気がするわけです。田舎でも無縁社会が広がり、絆が必要だということになってくるのです。

我々の身近な所でこういう状況ですから、困ったことを何処に相談に行ったらよいのか。地域の中で大変となれば、新しい時代の「肝いり」のものが何処かに必要になる。

我々が考えてみたこれからのあり方というのは、1つは現場で話しを聞くという事。そして核になるものがいるということ。もう1つの役場、或いは集落支援センター、地域のプラットホームのようなものがいるだろう。





◆小銭が地域の中で回る仕組みづくりを

まちづくりはボランティアでやるのは当たり前というのは、10 年前には良かったと思うのです。しかしながら、やはりお金儲けを意識の中に持たないと、まちづくり・地域づくりはやっていけない、というのがようやく一般化され理解されてきたというのが現状です。

そして、もう1つの収入源の道としては、公的サービスの請負ができるかどうか。直接支払い制度あたりは非常に確実です。

もっと仕組みがしっかりしてくると、介護保険の事業者になれるかどうかという事です。それはお金の道としては、一番有望なのではないか。それを福祉法人に任せるのではなくて、地域で福祉事業をやっている力量をつける事ができるかどうか。これからの課題ではないかと思っています。

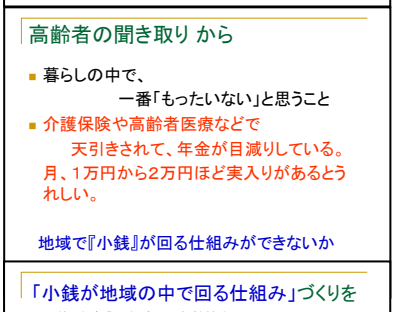
これは、我々が地域に出掛けての聞き取り調査の様子です。覚悟しなければいけないのは、1サンプルを最低で2時間くらい見て頂かないと本当の話しは聞けない、ということです。

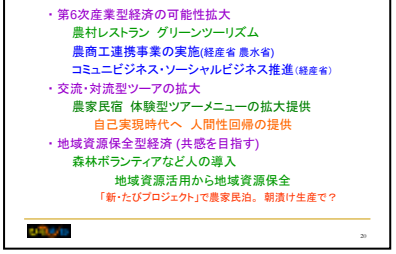
そして日常の暮らしの中で、爺ちゃん、婆ちゃんが一番勿体ないと思っているのは、何だと思いますか。

皆さんは非常に豊かな環境で暮らしていらっしゃるので、それは無いかもしれません。でも1人暮らしの方もいらっしゃるでしょう。マンションに住んでいても、アパートに住んでいても、一人暮らしだと、同じことなのです。それは“お風呂”だということです。わかって頂けますか。

1人で入るときも 40 度、50 度迄温度を上げなくてはいけない。爺ちゃんと婆ちゃんの2人でも、その温度に上げなくてはいけない。広島市内の大学生でもそう思う。若い人はシャワーで済みますが、お年寄りはそうはいかない。

そんな話しの中で、こういう話しが出てくるのですよ。“月に、もう1万円か2万円の見入りがあるといいね。”まさに、ビジネスまでとはいかないにしても、地域で小銭が回る仕組みを作ってくれないかという要望です。コンサルの皆さん、これに答えていけるアイデアはありませんか、そんな質問を投げかけられた事はありませんか。本音の部分を聞くとそこに行くのです。年金がどんどん下がっているので、それにどう応えるかです。





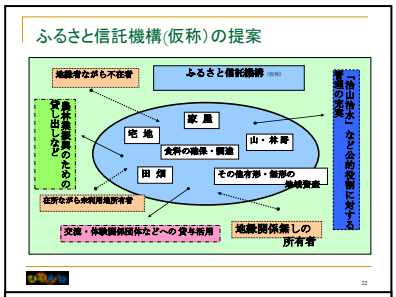
小銭が地域で回る仕組みづくりというのを随分議論しました。新しい物を作って売っていく、或いは、6 次産業化かというのもあります。でも、なかなかそんなものをお年寄りとやっても上手くいかない部分がある。その中で、行き着くものは、新しい旅の提案ではないかという所で、我々の結論が出ました。

「新・たび」という新しい旅の提案をしていこう。中国山地の農家というのは、家が大きい。使っているのは、お正月とお盆だけなので、それを日常使えないか、という様なことの話しをしてきました。

◆地域資源の信託機構を、地域で受け持つ

そしてもう１つ、農山村で大変なテーマ・問題は、遺産相続が上手く出来ていないこと、という話を聞かれませんか。

勿論、田んぼは良いのですが、山の境界が分からないという。山ですから、面積 50～100ｈａの単位になり、なかなか印鑑が揃わない。判子を貰うには、全国を飛び回らないと。それだけでは済まないと外国にも行かないと揃わない。承諾書の判が取れない。それぐらいに代々にわたって遺産相続が出来ていない問題が非常に大きい。



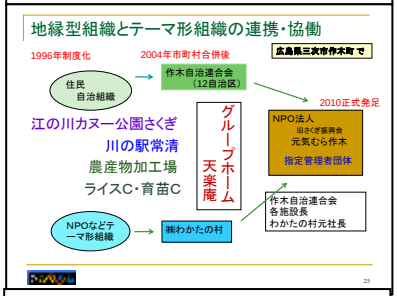
そういうものも含めて、我々も困っている所なのですが、地域の資源というものをもう一度整理をしながら、信託を受けていくような仕組みが出来ないだろうか。有効利用をするというのを、有形・無形の地域の資源を一括して纏めて面倒をみていくような、信託機構ができないか。

国土を有効利用するという事ですから、税金をここに投入しても良いのではないか。この事業主体を地域のプラットホーム組織、法人委託を持たないと駄目ということになるでしょうが、そんな所を手掛けていくことはできないか、今そういう提案をしています。

◆地縁型組織とテーマ型組織の連携・協働

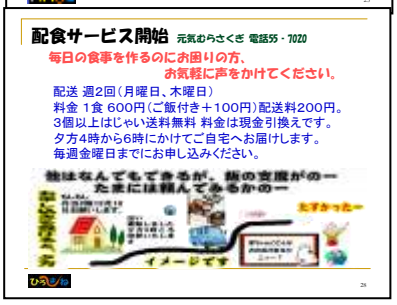
そんな中で、具体的な動きとしての「口羽を手ごぅする会」では、元々はガソリンスタンドの跡に事務所を構えていましたが、今は観光目的に作られて現在空き家になっている施設に移転しました。建物の中はとても良いので、月１回ぐらい屋外の市を開けないかという話しをしています。

視察で来られた時は「株式会社わかたの村」を作った直後だったと思います。これを、少しして名称変更し、ＮＰＯ法人に組み替えました。今、グループホームも請けています。小さい９床しかありません。観光施設、農産物の工場、ライスセンターという所を請けています。構成メンバーも多岐に渡った理事で運営をしています。



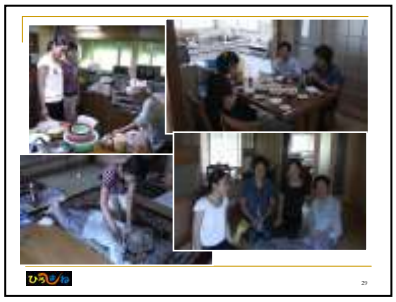
地域で核になる仕組みが、これからはどうしても必要になると思います。合併特例で各地に自治連合会、住民自治組織などが作られましたが、残念ながら時間と共にマンネリ化をしてきて、行政の下請け組織になってきつつあります。それはそれで必要なので、チェーン型の組織は１年持つと、合わせてテーマ型で活動できる。勿論、収益事業も目指してやっていくようなＮＰＯ法人、テーマ型組織と抱き合わせで地域を切盛りする組織という仕組みが必要なのではないかと、現在考えている所です。

指定・管理を受けている施設として、カヌー公園、道の駅に近い川の駅、グループホーム。新しい事業としては、こんな事もやってきました。



今、好評なのは配食サービスです。配食サービスは、どこの社会福祉協議会もやっていますが、月１回のサービスです。我々の所は、週に２回です。会を運営する側も大変ですが、本業のレストランを飛び越えて、こっちの収益の方が多くなるのではないかという話です。高齢者の毎日の食事というのは、大変という所から、非常に好評な事業の１つになってきました。

◆「しん・旅プロジェクト」の取り組み



もう１つは、観光、新しい旅のあり方という事で、勝手に出掛けてやっていったお年寄りへのボランティアサービスというのを宿泊型で出来ないか。泊りがけで行って、生活のお手伝いをするという取り組みの実験をやった図柄です。これは、農家民泊の前哨戦といっても良かったかもしれません。お年寄りが非常に喜んで下さったということがあります。

そしてもう１つ、買物難民と言われますが、買物に出かけて行く事業です。これも最初はお買物として出かけて行く予定を組んだのですが、その

買物だけでは勿体ないので、途中でお風呂に入って行くとか、桜の季節には桜を見に行く場所に出かけていくという事で、１日のバスの旅の提案をしました。そして仕事が終わって反省会をしてみると、バスの中がデイサービス状態なんですね。移動型のデイサービスをバスの中でやっているということ。１人３回、2000 円で 18 人、２人付けても、何とかやっていけるかなという事業になってきています。

そういったバスの旅、食事の関係、ボランティアの宿泊等も含めていくと、どうしても新しい旅で収益を上げて行くというのが必要ではないかと思い始めています。着地型観光の時代になることは確実になってきていますし、もう１つ目指す所は、修学旅行生を受け入れられるかどうかの仕組みがいるのではないかなと思っています。地域で最低でも 300 家庭を確保していないと、1 クラスを受け入れるという事にはなりません。５年 10 年先かもしれませんが、教育旅行の受け皿が必要になるのではないか。

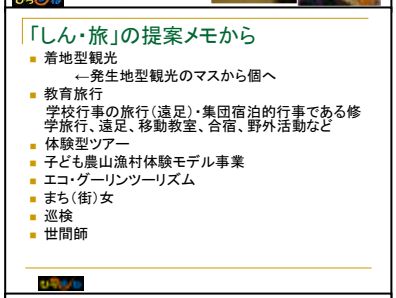
まち（街）女という人達の旅のスタイルが全国的に増えてきていると言われています。そんな旅の変化に対応できるものが必要ではないか。

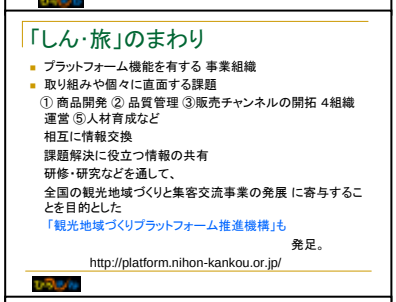
観光地域づくりのプラットホームというようなものも、新しく全国的には発足しました。私達がやっているひろしま NPO センターで、島根、広島、山口の観光施設のプラットホームの議論をしています。

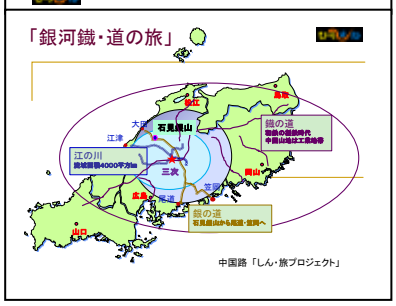
我々としては、観光施設が温泉施設も持っているし、地域の中の核になって貰いたい。「もう１つの役場」の機能をそこで果たして貰えないか。施設の事に関してもそこで話しています。実際、国の事業の中で、観光地域づくりプラットホームの事業化、事業のメニューの中にも出てきています。そんな形での新しい観光への取り組みが動き始めています。

それに呼応した形で、３年位前になりますか、我々も地方の元気再生事業 1300 万円を貰ってこんな調査をやりました。

農家民泊も大事ですが、ルートづくりが必要だろう。１つは世界遺産の石見銀山をベースにした「銀の道」、江の川の「河の道」、中国山地全体の製鉄の歴史があります「鐵の道」という事です。これを少し格好良く言えば、「銀河鐵道」です。







この「しん・旅プロジェクト」を動かしてきています。これがその時の作品の１つで、こういうガイドブックを日本語版、英語版、中国語版で作っています。

◆国の事業の活用を

そして、国の動きを見ていますと、様々な取り組みがあります。

一つは、「新しい公共支援事業」です。残念ながら今年度で終わりますが、88 億円というお金を予算計上して、10/10 を全国にばらまいた。広島県も１億 4,5000 万円、皆様方の仕事にもそのお金が回ってきたのではないか。

今日午前中、私共のひろしま NPO センターで、中山間地域対策の事業をやろうと企画・提案を求められて、1000 万円の予算を貰って観光施設のプラットホームをベースにした地域支援事業をやろうという話をしてきました。これから先は、こんな事業の期待は出来ませんが、動いてきております。

もう一つ、本日、大分の松村さんが来ていますが、国土交通省の水資源関係です。全国プロモーション事業があり、ダムのあるような水源地域の物産はなかなかマーケットになり難い、それの支援をしようというのが１つ。さらに、是非、皆様にも応募して貰いたいのですが、水の里の旅コンテストというのを毎年やっています。体験型観光のプログラムです。賞金

はでませんが、評価は高いです。

皆様方のおやりなっているものが、他の地域で評価されるというチャンスもありますので、是非、鵜の目鷹の目で、国なり地方のホームページもご覧頂きたいと思います。

◆地域自治に向けて、中間支援組織の設立を

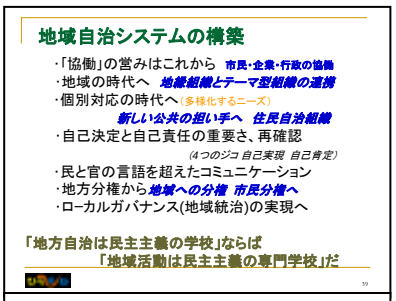
最後にお話ししたいのは、自治のあり方です。住民自治をベースにおいて、地域づくりを進めて行くのが重要ではないかと思っています。

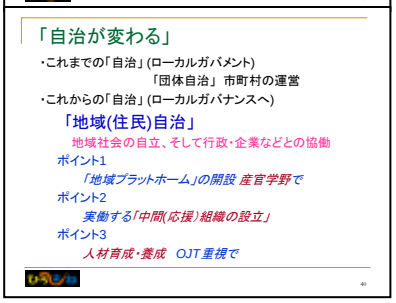
地域のプラットホームづくりを是非考えて貰いたい。それには、産官学の分野を超えて計画をして貰いたい。本当に動いて行くような、中間支援組織がいるのではないか。その辺りになると、コンサルの皆様も関心があるのではないかと。

視察にお見えになった時に、我々としてはどこまで支援できるかが心配と言われていましたが、技術はあるけど、なかなかシンクタンクにはなりきれない。シンクの部分も、調査・研究の部分のお手伝いをして貰うと、地域に対しても両方ともいい感じでお仕事もできるのではないかという気がします。

そういった人材育成という事が大きなポイントになるかと思っています。我々の活動における煌びやかな分野でもあります。

どうも有難うございました。





江の川冬景色 下流北方向 湊の瀬

島根県旧羽須美村藤社集落
12戸が全戸他出

12

第3部　パネルディスカッション

～　建設コンサルタントのもうひとつの可能性　～

コーディネーター　小川　全夫（熊本学園大学 社会福祉学部 教授）

パネラー　安藤　周治（NPO法人ひろしまね　理事長）

和泉　大作（建コン協会 技術部会／福岡県農業・農村振興審議会委員）

平野　巌　（建コン協会 夢アイデア部会）

波木　健一（共助研）

小川

今回のテーマは、建設コンサルタントのもう１つ可能性を探るということです。

公共事業等が冷え込んでしまっている中、建設コンサルタントの人達が、どのような可能性を地域の中に見出しているのか、こういった事についての議論が出来ればと思っています。

まず、最初に、和泉さんからお話を伺って、平野さん、そして波木さんの方からは共助研活動の紹介、という流れでお願いします。

安藤さんの方からは、先程中身のあるお話を頂きました。それに対するコメントで問題提起して頂き、議論を進めて行きたいと思います。

本当に限られた時間ですので、手短にお願い致します。

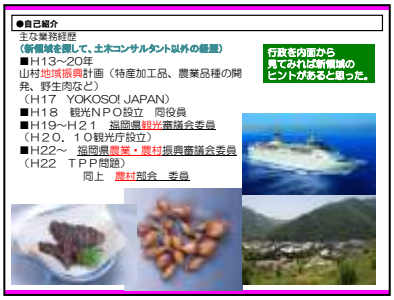
和泉

私、建設コンサルタンツ協会技術部会からの立場で参加させて頂いています。建設技術研究所というコンサルタントに所属しています。

口火を切って話題提供をと思い、パワーポイントを用意しました。少しだけお付き合い下さい。

ちなみに、今日の参加者には 1/5 から 1/6 位、建設コンサルタントではない方がおられましたので、聞きにくい事がありましたらご容赦をお願いします。分かりにくい言葉は、なるべく使わないように致します。

◆コンサルタント以外にも目覚め、観光審議委員に



私がどういう人間か、なぜここにいるのかを含めて自己紹介をしたいと思います。

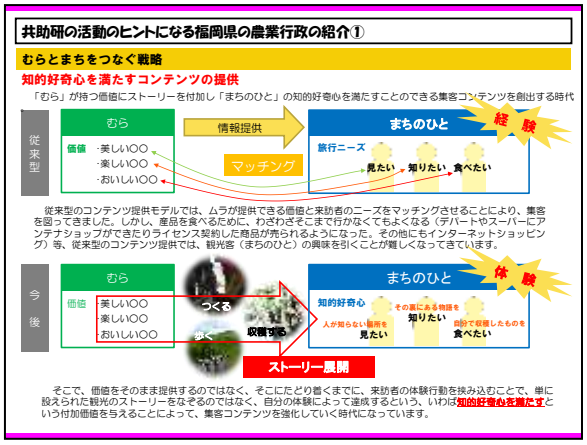
私は、建設コンサルタントを生業としています。平成 13 年から 20 年頃に、山村振興とか地域おこしと言われる事に関わる機会が多くなってきました。この写真の様な食品開発とか、農産物開発とか、学識者の方々と一緒に地域の方にアドバイスをするというコンサルティングをやってきました。

それをきっかけに目覚めることがあって、建設コンサルタント以外の部分も面白そうではないか、と。建設コンサルタントは行政に近い立場で仕事をするのですが、もっと中に入れることはないかと思って、考えた事です。平成 18 年以降の活動は、建設コンサルタントの社員としてではなく、全くの個人の行動です。

最初、観光に興味をもちました。前年に「ようこそジャパン」の施策が出て、自分も旅行が好きだったので観光ＮＰＯを作りました。もしかして会社をクビになっても、そっちで食っていければ、なんて野望を抱いた 30 代前半で、役員という肩書きも欲しかったので、そこの設立に関わりました。

その後、福岡県の観光審議委員を平成 19 年から 21 年までさせて頂いていた所、平成 20 年 10 月に「観光庁」が設立されて、その方向性は間違ってなかったと思いました。

◆観光から農業・農村の活性化助言へ



平成 22 年からは、観光審議委員は終わったのですが、農業・農村もいいかと思い福岡県に審議委員にして頂いた所、ＴＰＰ問題が出てきて、これも方向性は間違っていなかったと思った次第です。

私は共助研のメンバーではないのですが、皆さんのお話しを聞いて、話題提供として私の関わっている福岡県の農業行政を少し紹介できたらなという次第です。

マチと村を繋ぐということで、共助研の方もお話しされていたのですが、従来は、村の人達のニーズ、美しい水田が見たい、楽しい農作業がしたい、おいしいお米が食べたいと、マチの人達の“経験したい”という旅行ニーズのマッチングに重きに置いていました。しかし、先程、安藤さんからお話しがあったように、ストーリー展開というような事もニュアンスとして持っておかないといけないと思って、県に農村の活性化施策を助

言している所です。

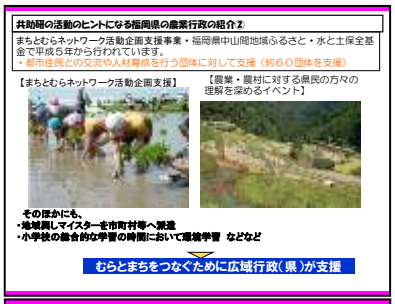
福岡県では、農業支援を古くからやっていたと知っていましたが、平成５年からは交流ネットワークを実施し、現在 60 団体を支援しています。マチと村で関わる事業とか営農に関するサポートとかをやっています。1つのマチや村で出来ないから広域行政の県が応援している、と理解して頂ければよいと思います。

もう１つ、これは今の話とは別の問題で、“ふくおかの農業応援ファミリーになりませんか。”という事業があります。福岡県在住の方で、このことを知っておられる方いらっしゃいますか。（会場に問いかけて）お１人だけですか。結構、ＣＭを打っているのですが、こんなに知名度が低いとは思いませんでした。

これは、無料で日帰り旅行が出来るのです。税金を使ってです。去年の９月に事業が開始され、平成 23 年は 624 人の方が参加されました。今年は 40 回のプログラムが組まれていて、2000 人を日帰りで連れて行ってくれる。実際、私も６月に参加して、築城基地のある築城にジャガイモ収穫に行きました。

すぐ近くの博多駅にバスが迎えに来ます。去年は旅行のツアーガイドさんがついて来てくれたのですが、今年は、県庁職員が自らガイドして経費削減し、その削減分で回数を増やすということでやっています。

体験して思ったことはいろいろありますが、私達が農業とか村との出会いを通じて、何かコンサルタントとしてアイデアがないかなと思って、頭を整理したらこんなまとめになりました。以上、私からは情報提供までしたので皆さんの意見や解釈などについては後ほど聞かせてください。



◆我々には、社会コンサルタントになれる素養が

話しを纏めます。私達は建設コンサルタントです。冒頭で、針貝会長もおっしゃいましたが、これからのコンサルタントとして、もしかしたら「建設」という文字が足かせになるのではないかと思います。

最近では、建設コンサルタントでも、エネルギーとか、金融とか、流通とか、今話した農業とか、観光とかをやってきています。部分的には、福祉とか、医療とか、教育もやっています。芸術活動、文化活動とかの自信のない分野には、学識者とかにお越し頂いて、というかたちでやってきました。

こういう所は、まだ入ってないですね。もしかしたら、我々は、「社会」コンサルタントになれる素養があったりする。アイデアとか、手が動かせるスキルとかがあるので、そういった方にいってもよいのではないかと、本流から外れたいろいろな仕事をしながら思うわけです。

つまり、社会全体の中で俗に言う「飲む・打つ・買う」といわれるものはしっかりした別業界があるので手を出さない方がよいと思いますが、それ以外は全てに興味をもって取り組んでも良いのではないでしょうか。

たとえば、これまで建設コンサルタントとして培ってきた技術や知識、行政のパートナーとして長年つき合っていることなどを考えると、土木部だけにとどまるのではなく、多様な行政部局を横につなげることが出来る素養を我々は持っていると思います。建設行政にとどまらない「社会コンサルタント」としてやっていくのが良かろうという考えを述べて、最初の話題提供とさせて頂きます。

小川

ポイントを提案して頂きました。「建設コンサルタントから社会コンサルタントへ」と非常に分かりやすい、キャッチフレーズが出ました。ありがとうございました。

平野

建設コンサルタンツ協会の「夢アイデア」事業企画委員長の平野です。福岡の東亜建設技術株式会社に所属しています。

◆10 年間で 500 編の夢アイデアが

まず、「夢アイデア」事業をご紹介します。第 1 部の共助研活動報告でも紹介がありましたが、平成 14 年に、新しい社会資本整備を考えようという事で、市民の発するアイデアを我々が如何に実現できるか、新しい社会資本整備のあり方を考えるということで始めました。

これまでに 10 年程やっておりまして、市民の方から「夢アイデア」を 500 編ほどいただいています。それについては今、10 年の区切りとして、どういうアイデアが出きたか、どう展開するかをまとめている所です。

◆地域からの発想で、4 つのプロジェクトが実現

では、どういうアイデアが出て、どう実現化を図ったのかという話です。

お手元に、「第 10 回まちづくりに関する提案の募集」のチラシが入っていると思います。その中の左側に島原城とヤギの写真がありますが、「ヤギ・羊 eco プロジェクト」という事をやっています。これは、第 6 回に長崎県の職員の方が応募された最優秀作品で、地元の方で色々活動しています。協議会も出来て、結構軌道に乗っています。真ん中の山桜写真は、先程の共助研による実現化事業となっています。

それと右側上が、「思い出ナビ」という昔の風景写真を使って、まちづくりをやろうという事業です。この写真は宮崎県西米良村での写真で、大学生 20 人程を連れて来て、高齢化が進んでいる集落で 1 日お爺さん、お婆さんから話を聞き、それを物語として「思い出ナビ」という写真スライドに編集します。このように、まちづくりの人材育成についても取り組みをしています。

右側下は「夕陽時計」というもので、実際に古賀海岸に出来ています。夕陽が綺麗な海岸で、その日、夕陽がどの方向に沈むかを示す時計として整備しています。

このように 10 年間やってきて、現在、4 つの具体的なプロジェクトが動いています。その中で、今日のテーマであるもう 1 つの可能性を探るという所を色々考えるのですが、先程、和泉さんからは提案がありましたが、まだぼやっとしてまとまっていない所です。

最後に、チラシの紹介です。まちづくりに関する提案を、9 月 30 日まで応募を受け付けています。お金で釣ろうというわけでもないのですが、最優秀作には「10 万円」の賞金ということですので、宜しくお願い致します。12 月 1 日には、この募集提案から 10 件ほどを選び、プレゼンテーションして頂いて、最優秀者を決める交流会を開催する予定です。是非ご参加して頂ければと思っています。以上です。

小川

ありがとうございました。「夢アイデア」という考え方で地域の住民の方に寄り添いながら、それを具体的な指針としていくという、提案募集活動をやっておられるようです。皆さん、是非参加していただくよう、宜しくお願いします。

それでは続いて、波木さんの方から、共助研のこれまでの活動を通したご意見を頂けたらと思います。

波木

皆さんこんにちは、共助研事務局長の波木です。この 3 年間で少しずつ、皆さんには当会活動に関心をもってきて頂いているのかなと、非常に嬉しく思っています。

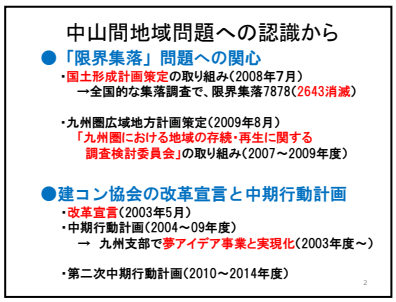
第一部で、当会会員からこれまで 3 年間の共助研活動を報告しましたが、どちらかというと、会内部から

みてこんな活動をしました、というお話しをさせて頂きました。そこで、この３年間を客観的に見たらどう総括できるだろうかという事で、ＰＰＴにまとめてみました。

◆「限界集落」問題から共助研の活動が

我々は、中山間地域問題に関心を持ってこの活動を始めました。今日ご参加の小川先生、安藤さんは、過疎地問題については長い経験をお持ちで、日本全体をリードされる活動を永年進めて来られています。

一方、私共コンサルタントについては、正直な所、「限界集落」という問題が出てきだしてから関心を持ち始めた。非常に申し訳ないのですが、そういう立場です。



2008 年に国土形成計画が策定された。その際に、国土交通省が全国的な集落調査を行い、全国で限界集落が 7878 集落、今後５～10 年後にはそのうちの 2643 集落が消滅しますよ、という非常に衝撃的な数字が発表され、マスコミで大々的に報道されました。

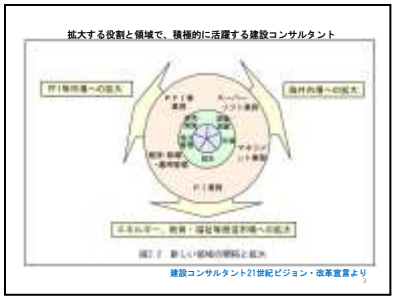
それに続いて、九州圏広域地方計画が 2009 年８月に策定されましたが、その前３ヵ年をかけて、「九州圏における地域の存続・再生に関する調査検討委員会」（小川先生が委員長）が、九州内での中山間地域集落実態を調査し、その集落維持をどうフォローしていくかを示すガイドラインをまとめました。このあたりが、我々共助研の出発点です。

◆同時に、２１世紀型の建コンのかたちを模索

我々のもう１つの出発点ですが、2003 年に建コン協会本部が「改革宣言」を作成しています。

この宣言は、バブル経済が弾けて以降の行政の財政制約により業務の総枠が減少する中で、建設コンサルタントそのもののあり方を、21 世紀型という新しいかたちで創りなおしていこうという改革宣言です。

この宣言を受けて中期行動計画が作成され、これと並行して九州支部では、平野さんからご紹介があった「夢アイデア」事業が大々的に動き出し、現在も進んでいるという状況です。



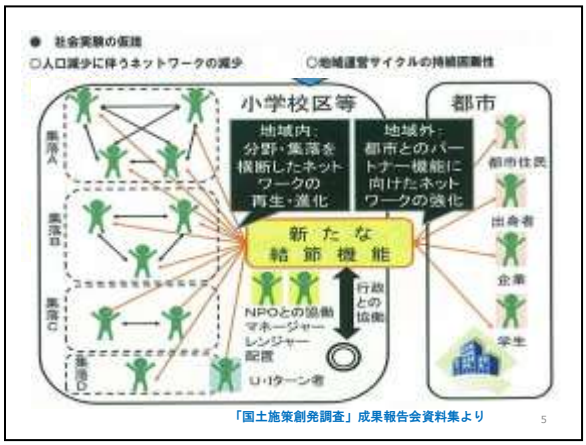
この建コンの改革宣言には４つの柱があって、その中の１つに「拡大する役割と領域で、積極的に活躍する建設コンサルタント」とあります。

これまでは、「測量」、「調査」、「計画」、「設計」の技術をツールとして社会資本整備に関わってきましたが、少し広く考えると、マネジメント業務、スーパーソフト業務、維持管理業務とかに繋げていく展開が考えられる。それを更に広げて、ＰＦＩ、エネルギー・教育・福祉等の周辺市場そして海外市場、これを３つの柱としてマーケットを広げていけるのではないか、というのが、改革宣言の特長です。

この流れの中で、第４回「夢アイデア」募集における“農山漁村と都市との交流を通して人口減少時代に対応していこう” という提案を受けて、その観点から新しい建コンのあり方を模索してみようとしたのが、そもそもの共助研の始まりです。

◆中山間地域先進地で、地域支援のスタイルを学ぶ

2008 年に、現地視察として安藤さんのところに押しかけて、「もう１つの役場」とか、「集落支援センター」とかの仕組みを学びました。その中で、コンサルタントには、地域に腰を据えて汗を流すような行動力がいる、さらに、地域の方々とのコミュニケーション力、調整能力も大事で、シンク＆ドゥータンクというやり方を考えて行くべきだと指摘され、視察した仲間全員が「目からうろこ」という貴重な経験をしました。



ここに、集落支援に向けた社会実験による仮説という絵があります。集落の中で人口が減少し、ネットワークいわゆる社会関係資本（ソーシャルキャピタル）が減少していく。そのネットワークの減少による地域運営サイクルの欠如を埋めるために、外部の人が入ってその集落維持をサポ

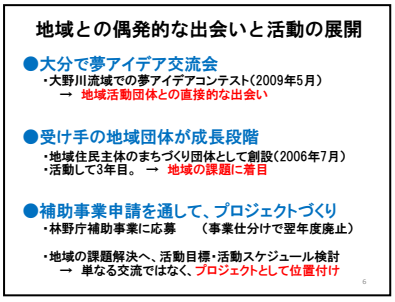
ートする。こういう社会的な要請が出て来ている。

そこで新しい形として、小学校区単位で集落を繋ぐ新たな結節機能を設ける。既に安藤さん達が取り組まれている「もう１つの役場」という形です。ここに、外部の人間として都市部からも関わりをもって色々なネットワークを作り、集落維持の仕組みを作って行こうと、我々は習ったわけです。

◆大野川流域で実践したのが、柴北川プロジェクト

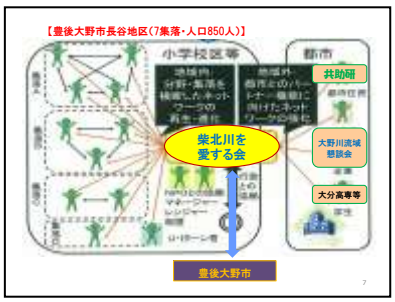
大分で大野川流域懇談会が「夢アイデア」交流会を開き、我々も参加した所、地元の活動団体と出会いました。実は、建コンとしてはこのようなつながり方は非常に珍しく、普通は行政を通して地元と対応しますが、行政を通さずに地域と直接的なつながりができたということです。

この団体が豊後大野市犬飼町長谷の「柴北川を愛する会」です。川や地域の環境整備を目的として設立された団体で、立ち上げて３年目でしたが、地元の小学校の廃校とか、高齢者の独居老人の増加とか、色々な問題が出てきており、そういう問題に対して何か対応がいるね、ということを考えておられました。



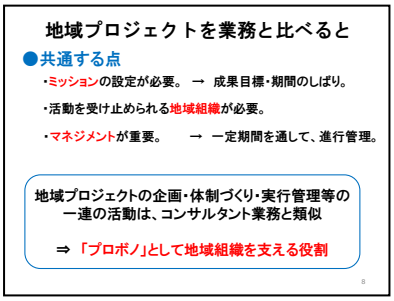
そして、「柴北川を愛する会」と共助研とで何かやりましょうとなって、たまたま公募期間中だった林野庁の補助事業（山村再生プラン）に応募して見事に選定され、これで活動資金が頂けました。

実は、この時に「愛する会」と共助研が協働で事業申請をし、地域課題を両会が共有した、これが大事でした。これらの課題に対する活動目標と３月迄の活動スケジュールを検討した事で、単なる交流ではなくプロジェクトとして動き出した。我々としてもラッキーだったと思います。



先程の地域内関係図に、長谷地区の状況をかぶせます。小学校区が長谷地区７集落で人口が 850 人、高齢化率が 35%を超えています。この真ん中に「柴北川を愛する会」が位置します。「愛する会」の皆さんは、決して結節機能をやろうということではなかった、しかし実質的にこういう形が出来上がった。

外部からは既に「大野川流域懇談会」と関係がありましたが、これに共助研や地元の大分高専も関わって地域支援をする、こういう構図が出来ました。実際の活動は、先程の木寺さんの報告のとおりです。



◆地域支援活動と建コン業務の共通点は

この地域プロジェクトをやってみて、通常の建設コンサルタント業務とはどう違うか比較してみました。

まず、共通点です。第１に、ミッションの設定が必要です。普通、業務を受託すると必ず特記仕様書を貰います。契約としての業務の成果目標、あわせていつまでにやりなさい、という工期が必ずあります。２番目は、我々の活動を受け止めてもらう地域組織がないと難しい。通常業務では、行政が該当します。それから３番目は、業務をやっていく形としてマネジメントが大事だということです。

そういう面で考えると、我々がボランティアとして入っていった地域支援活動は、企画、体制づくり、実行管理などと、通常のコンサルタント業務と非常に類似しています。

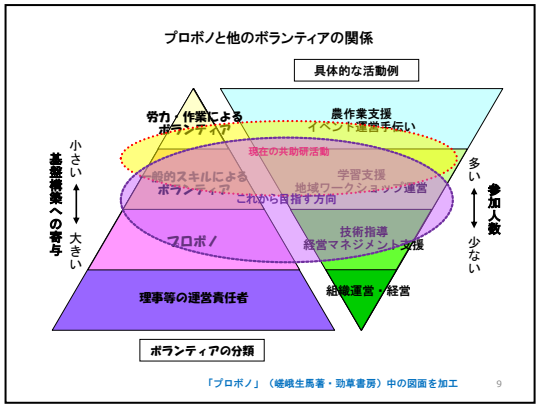
◆新たな概念としてのプロボノというかたち、役割

ここで、「プロボノ」という新しい概念について少し紹介します。

地域に入るボランティア組織、例えばＮＰＯのような組織と考えて頂くとよいと思います。組織の根底に理事等の運営責任者がおられます。

そこにボランティアの方々が参加していきますが、一般的なのが労力作業という形で沢山の方々が入ってこられます。農作業や、イベント分野を手伝ったりする。

それから、少しスキルを持ったボランティアが入る。これ



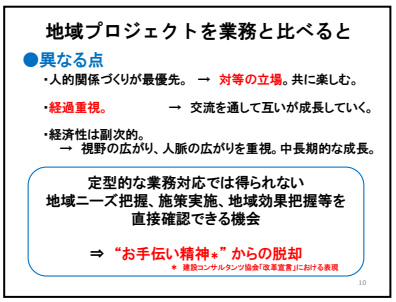
は学習支援やワークショップ支援をする。

そして、ここに「プロボノ」が位置付けられています。非常に専門性をもって参加し、このＮＰＯの組織運営を技術指導や経営マネジメント面からサポートします。

この「プロボノ」の概念は最近出てきました。我々が地域に入った時には、この概念のことは全く知らなかったのです。ただし、現在の共助研活動は、恐らくボランティアとプロボノの中間あたりではないかなと思っています。まだ、「プロボノ」と言い切れるまでにはなっていない。今後は、「プロボノ」の位置づけを含む高度なボランティアという形に行くべきではないかと考えています。

◆地域支援活動と建コン業務の相違点は

次は、地域プロジェクトが我々の通常業務と違う所を、いくつか紹介します。



１つは、地元の方との人間関係づくりが大事です。我々は都市にいて相手は地方という事で、少し優劣を考えたりするのですが、両者が対等でないとダメだという事です。共に楽しむという考えが重要です。

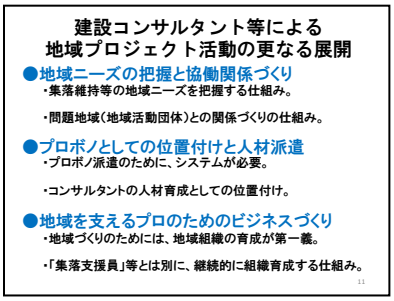
２つめは、プロジェクトの経過を重視するという事です。交流しながら互いに成長していく、その過程を大事にする。場合によっては当初の目的が達成されなくてもいいので、経過を重視するという考え方。

それから、経済的な観点では、なかなか十分な対価が得られない。しかし、この活動を経験する事で、視野の広がりとか人脈等の広がりが出てきて、個人にとっては中長期的な成長が期待できる。また、通常の定形的な業務では得られないこと、例えば、地域のニーズ把握や施策実施により実際にどんな地域効果があるかを確認できる、そういう場となります。

ここに「お手伝い精神からの脱却」とありますが、実は、建コン協会の改革宣言の中にある言葉です。

建設コンサルタントは、行政のパートナーとしてお手伝いをして、実際に地域が動き出した時には腰が引けている。実際、私もそういう事があるのですが、そういう「お手伝い」ではなくて、実際にプロジェクトの主導者になっていく。そういう場があるというのが違う点ではないかと思います。

◆地域支援活動の展開に向けて



今後、建設コンサルタント等が、地域プロジェクト活動を更に展開していくために検討すべき３点をお話します。

まず、地域ニーズを如何に把握するか。その地域との人的な繋がりがないと、地域ニーズが見えてこない。さらに、その問題地域での地域活動団体との関係づくり、これをどう仕組むかが１点です。

それから、「プロボノ」という立場を使うとして、如何にその地域に入っていくか、派遣のためのシステムづくりをきちんと考えなければならない。あわせて、我々も、日頃の業務対応だけですぐにプロボノとして活動するのは難しいかもしれません。その為の人材育成ということも考えていく必要がある。

それと最後は、地域を支えて行く為にいつまでもボランティアというのでは、コンサルタントとしても厳しい所があります。それをビジネス化して行くことが第一だと思います。地域に「新しい公共」を根付かせる為に地元の地域活動組織を育てて行く、そこを我々がビジネスとして支援していく。

例えば、総務省による集落支援員等の制度があります。これは３年位の期間限定で人的雇用をし、地域支援を行います。この３年間の期間内で地域がちゃんと育ってくれれば良いのですが、もっと長期間継続してお付き合いし、地域を自立させる組織を育成する。このような仕組みにコンサルタントが上手く位置付けられないだろうか。そのような事を考えています。長くなりましたが、以上です。

小川

ありがとうございました。これまでの活動の総括として、「プロボノ」としての建設コンサルタントのもう１つの道を考えてみた。そこにおける実態というのをまとめて、ご報告を頂きました。

以上、３人の方の報告を頂いた所ですが、共助研が発足した当時、視察に訪れた先が安藤さんの所であったということです。安藤さんの方から、今の波木さんや前の御二方のお話しを聞いて、どういうふうにご感想を持っておられるか。そのあたりから、皆さんに問題提起をして頂ければと思います。

安藤

今、お話しを聞きながら、もう１つの軸足としている「ひろしまＮＰＯ支援センター」の動きがそうあって欲しいなという思いを持ちました。

◆中間支援組織は、その役割を評価してもらいにくい

実際、福岡でもそうですが、ＮＰＯセンターとは、ＮＰＯ組織の支援の為のＮＰＯというご理解をして頂いて良いと思います。しかし、なかなかその存在感が発揮できないでいる団体が多いと思います。我々の広島でもそうです。

個々のＮＰＯは、具体的なテーマで動いているもので、成果も見えてきますし、マスコミでの扱いもはっきりしているわけです。

ところが、それを支援している我々ＮＰＯセンターは、影の役目で終わっているみたいな所があって、なかなか一般の皆様方には見え難い。屋上屋を重ねているのではないか。

「新しい公共支援事業」では、お前の所ばかりお金をもっているのではないか、とか言われています。

アサヒビールは、福岡県内のアサヒドライ１本につき１円のお金を、自然環境のための寄付としてお金を動かしています。広島県でも、瀬戸内海をきれいにするという事で、毎月、一千万円位を預かって配分しています。それも、ＮＰＯセンターの役割として非常に大きいと思っていますが、なかなか評価されずに、お前の所得になっているのではないかと言われるのです。残念ながら、手元には残っておりません。

そんな状況ですから、なかなか中間支援型の組織として、これからやって行くというのは、身入りの事も含めて大変だと思います。

◆恒常的に、財布の中身をどう作るかが悩み

これは、何処かにスポンサーが付いているとか、あるいは、実際に動いて収益が上がりその何％かを返して行くというシステムがない限り、なかなか持ち出しでしか行かない。ということで、我々としても限界を感じております。

広島ＮＰＯセンターでは、今期は１億５千万円位の事業費になると思います。その８割方が「新しい公共支援事業」の請負で動いています。現在、職員さんが 14 名いますが、来年以降が大変です。そのために、先程のハード施設のネットワークの中で仕事をして行こう、という分野を１つ組み立てながらやっています。

そういう意味では、これからの組織の維持として、ミッションも分かりますが、それをどう裏付けして展開していけるかが、共通の課題ではないかなと思っております。

代表理事としての悩みの種の一つとして、財布の中身をどう作っていくのかを、是非一緒に議論をしていきたいと思っていますが、困惑しているというのが実情です。

小川

問題提起として、「志や良し」としてＮＰＯを支援する中間組織を作り上げた時に、その成果というものもなかなか見え難いし、運営という所でお金がどうも問題になっている。

波木さんの話しの中でも、いつまでもボランティアという訳には行かないだろう。やはり、建設コンサルタントのもう１つの可能性というのは、ビジネスとしてそれを成り立たせる事が出来るかどうかというのが、１つの課題であるという指摘を貰いました。

細かい所について、少し話しを前に進めたいと思っています。

まず、和泉さんは、安藤さんのご意見について、どういうふうにお考えでしょうか。

和泉

私、最初にＮＰＯに関わった話しをしましたが、実は今、関わりが薄くなってきました。自分の中では、そういう地域おこしとかは、本業の業務の中の方が多くなりました。

先程、波木さんの話しで、ハードからソフト重視みたいな話しがありましたが、やはりそちらに対する財政的な対応が、なかなか進んでいない。

それは私たち建設コンサルタントの成果に対する評価なのかという反省点もありますが、やはりソフト施策に対してお金を出すことが必要です。こうすることにより NPO

の人たちと我々コンサルタントがビジネスとして協働したり、住み分けたりすることが出来ると考えます。

小川

そうですね。日本では、ソフトについての価格形成能力が全く欠けていて、物として提供される場合に、その物にサービスでただのソフトが付いてくる、という考え方が強すぎるのですね。

また、色々なＮＰＯの支援において最初に問題になったのは、赤十字募金の還付金を社会福祉団体が使う時に、それを人件費に使ってはならないという改正をした。それが、そのまま今のＮＰＯにもずっと繋がっている感じで、人件費さえも捻出できない。そういう所の問題も、ＮＰＯの発展を苦しめる制約となっていて、ある程度迄は行くのですが、その後はＮＰＯの限界となって別の方へと、そんな繰りかえしをしている感じですね。

平野さんは、今の事についてお考えはありますか。

平野

そうですね。ＮＰＯという話しではなく、我々建設コンサルタントが如何に食っていけるかという事になりますが。

１つの例としてこれが適当なのか分かりませんが、島原での「ヤギ・羊 eco プロジェクト」というのは、元々は除草ということでやっていました。それが発展しまして、１つは観光の資源となった。それとヒツジも成長して大きくなりますので、逆にそれを如何に食おうかという事で、市民の方に参加して頂いて、20 何数種類のヤギ、ヒツジの料理を試しました、そのうちの一つを、「火山ジオパーク会議」があるので、ラム・ハンバーガーとして売り出そうとしています。後１つは、海岸にアオサが来るので、それを採って、ヤギ、ヒツジの餌にしようとしています。

そういう事で、地元で色々な展開をやろうとなっている、そこに我々が絡んで対価を貰うと良いのでしょうが、まだそこまでは行っていません。回答になっているかどうかわかりませが、そういう所です。

小川

こういう活動をする時には、おそらくその周辺に対する波及効果という所まで考えないと、最終的な経済の事に繋がって来ないだろうという事もありますね。

同時に、今は組織論の上でも、新たな取り組みが始まっています。もしかしたら、安藤さんの方から説明があったかも知れませんが、島根の方でもＮＰＯが展開して、ＬＬＰという新たな協同組合方式というものを使っています。

これは、ある程度の収益事業を行うもので、志としてはＮＰＯと同じように地域のニーズに即して取り組んで行きます。ただし、協同組合型として、その段階では課税の対象にしないで、そこに加わっている法人・団体の本業の方で課税の対象にする、という新しい産業組織の方式も、今、実験的に動き始めています。そういう新たな産業組織のあり方についても、少し考えてみる必要があると思うのですね。

今年は、国連が「協同組合年」と定めたのですが、日本の場合は、まだ、伝統的な農協、漁協、森林組合、生活協同組合という枠を超えて、その原理のメリットを現代風に改名する、ということができていないのが残念ですね。

諸外国では、こういうことについて非常に盛んなチャレンジが行われているという事です。皆さんのように、個人対応型の業務が多いコンサルタントの人達が、自分達の本業は本業として、事業協同組合を組み立てて、地元の人達と新たな産業となって行くようなプラットホームを形成していく。このような事があれば、その中から新たな経済ビジネスへの展開というのも出てくるのではないか、というのが１つです。その辺りが１つの課題ではないかなと思いました。

波木さんの方は、どうですか。

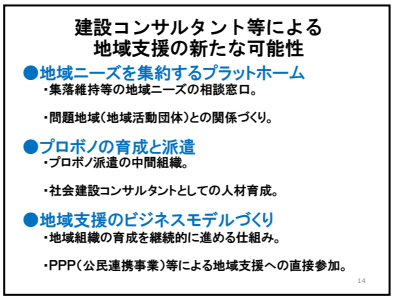
波木

我々の活動費用を如何に捻出していくかですが、現在共助研は、基本的に建コン協会の研究開発費を使わせて頂いています。「夢アイデア」事業も同様の流れで動いているわけです。

共助研活動の中でも、例えば柴北川プロジェクトを通して、作った「お米」をネット販売するとか、竹林を活用して事業に乗せるお手伝いをする。それによって、ゆくゆくは「柴北川を愛する会」に収益が上がりはじめ、その際には少し相談料位は頂けるかな、と期待している所はあります。

それにしても、それだけで我々の活動費全部を出すわけにはいきません。本日の報告会に、「建設コンサルタントの新たな....」とタイトルを付けているように、建設コンサルタンツ協会という団体があって、個々の会社がやるのでは大変な事が、協会のかたちとしてなら出来るのではないか。協会が「改革宣言」に載せた“新たな事業展開”という所のモデル試行を、建コン協会予算を活用して私達がやっているという認識があります。

それから、「プロボノ」の育成と派遣ということです。



建設コンサルタントは、専門家集団ですから色々な地域支援には必ず役立つ。皆さん日頃の業務が忙しいので簡単ではありませんが、少し意識をもってやってみたい方を、入れ替わりでも良いから「プロボノ」として地域に入って頂く、そのような仕組みが要ります。

先程、和泉さんが言われたように、建設コンサルタントではあるが、社会という概念の中でコンサルティングして行く、私は、社会建設コンサルタントと呼んでいますが、このような考え方を広げて行く。その為の人材育成として「プロボノ」を育成するということは、建設コンサルタントの社会的な役割の拡大に非常に寄与すると思います。そういう活動を、建設コンサルタンツ協会の活動として進めていく。

そして、地域支援のビジネスモデルという事で、先程の集落支援員制度だけではフォロー出来ない所を、もう少し組織的にやっていけないか。そこに、我々コンサルタントが入って行くための役割を見つけて行きたいという事と併せて、最近動き出したＰＰＰ（公民連携事業）にも着目したいと思います。

新しい施設整備というよりは、旧来からあるストックの管理。例えば、柴北川では小学校が廃校になりましたが、良い施設が残っています。その活用について、現在はなかなか関わりが難しく別の動きとなっていますが、あのような既存施設を活用し運営していくという所に、建設コンサルタントも入っていけないだろうか。今後は、そういう関わり方も検討してもいいのではないかと考えています。

小川

今のお話しのように、建設コンサルタントの協会がありますので、それを最大限に活用することによって１つの切り口が見えてくるのではないか。これは、組織としていろいろ考えて見られると、その方向性が出てくると感じます。

もう１つの「プロボノ」の養成、これは１つの大きな課題になってくるのではないかという気がします。

◆社会ニーズは「分業」から「統合」へ

ちょっと話しを切り替えて、僕の意見も聞いて頂きたいと思います。

日本の社会は、既に人口減少段階に入っているのですね。

特に、働く人達の減少傾向がこれから著しくなる。

そうなりますと、今迄のように、「分業」というものを前提として必要な事については専門家に任せきりにするという、小さな専門家が次から次へと出て来るという時代はもう終わった、というふうに認識すべきではないでしょうか。

これからは、少ない人数で多様なニーズにどう答えるかという事で、ある意味では「統合」の方に入るのですね。「分業」の反対は「統合」です。division の反対は、integration です。integration の言葉がキーワードになりますし、更に表現を変えますと、general とか、comprehensive「包括」という言葉です。

例えば、福祉の分野でも、施設ケアを中心とする、特別養護老人ホーム、老人保健施設、療養型病床群だとかを分けて、グループホームがどうのこうのとかを分けていく時代ではもうない。出来るだけ、地域に密着して多機能が１つの場所で提供できる仕組みにしよう。それを全体として、「地域包括ケアシステム」を構築するという事で言っているわけです。そういうような流れに、変わっていくわけですね。

先程の安藤さんの話しの中にありました様に、もう各地に、管理する人を失った山林・田畑、そして家屋、住宅、公共施設などがいっぱい出ているわけです。これらを今迄のような使い方でやろうとしたら、殆ど出来ないのです。では、それを人口減少の社会の中で、どういうふうにして「統合」して利用していくか、というのが新たなニーズなのです。

◆社会的な統合を図れるプロボノが重要

そういう意味で、地域に存在する様々な資源というものを、どのようにマネジメントしていくのか、そこで求められていくのが「プロボノ」という専門的なボランティアなのですね。そういう専門的なボランティアとしての「プロボノ」は、今迄のような狭い意味のコンサルタントには納まっておれない。

今日の話しにありましたように、和泉さんは社会コンサルトと言われましたし、波木さんは社会建設コンサルタントと言われたわけです。

ちなみに、ドイツでは、Soziale Stadt「社会都市」、英語ではSocial Integrated City といいます。つまり、都市の中にも中山間地域のような様々な問題が噴出してきており、それを解決するためには、社会的な「統合」を図るようなマネジメントをしていかなければならない、という事になっているわけです。

それを担っている人達が集まる所、これがプラットホームでもあるわけです。ではそのプラットホームにどういう人が集まるかというと、勿論、地元に住んでいる住民が、何よりも主人公です。しかし、その人達の力だけでは、どうにもならない。様々な所に、事業申請をしなければならない。そういうものを実施する時に実行管理をしていかなければならない。こういった時に働くのが、「プロボノ」です。

その「プロボノ」の中から、やはり事業が完成する迄は、有給でその仕事に携わるという形になってくるわけです。そういうものの可能性というものを、これからは中山間地域であれ都市であれ、やらなければならないという時代に来ています。

少なくともそういうことから言えば、自分達の成果というものを中心にして、再確認することも必要です。

◆実験的な事業から、恒常的な政策の提言へ

もう１つは、こういう時代に向けて、政策提言をしていかなければならないだろう。

実験的な事業というものを越えて、これを恒常化するために、そういう事に対しての取り組みを、全国から賛同者を集めて提案していく事が、次の道を切り開いて行く事になるのではと思います。

この共助研の方々のこれまでの歩み、そしてそのモデルになったＮＰＯ法人ひろしまねの活動の今の発展ぶりとその中で抱えている課題、皆が共有する事柄ですので、そういった事を是非シェアリングしながら、次の展開に向けて次の一歩を進めて頂きたいと思います。

限られた時間ですので、これ位のところでパネルディスカッションを締めたいと思います。

次回の時には、もう少し会場の皆様と意見交換が出来たらと思います。どうも、ありがとうございました。

全体進行役（前田）

どうもありがとうございました。

時間は少し超過しているのですが、会場からご意見ご質問を１つ２つ、お受けしたいと思います。

会場から

いろいろ意見を聞かせて頂いて、参考になりました。私は建設コンサルタントのＯＢです。

今、「夢アイデア」事業のサポーターとして、協会活動にも参加させて頂いております。

建設コンサルタントのもう１つの可能性を探るという主題ですが、平井さんからは大槌町復興の話がござ

いました。建設コンサルタントについてのいろいろな話があった中に、いろんなキーワードが含まれていて、大槌町とか東北の復興業務については、正に、今日の命題に関わる事があるのではないか、と思いました。

そこでは、実際に多くの建設コンサルタントの人が関わっているわけですが、この機会を捉えて広く社会に認識してもらう、地位向上を進める。

その中で、今日話題になった事を、新たな夢として如何に実現していくか。今迄は、お手伝いだけをやっていたという事で、いわゆる「官」から依頼された設計、調査などの部分だけをやっていた。

最近の東北の現場には、我々のスキルを発揮させるいろんな場があるのではないか。今日お話しいただいた中に、具体的な話や材料が転がっているのではないか。

建設コンサルタントの協会として、このような機会に、１つの方向性転換の場としてやるべき事が沢山あるのではないか、ということを、平井さんのお話しを聞きながら感じました。

ということで、私の感想を述べさせてもらいました。

全体進行役（前田）

ありがとうございました。ご意見として、我々も色々と考えて行きたいと思います。

それでは時間がきました。今回の報告会は、我々コンサルタントのあり方をふり返る、有意義な機会となったのではなかったかと思います。本日は、長時間お付き合いいただきまして、ありがとうございました。

●　参加者アンケートのまとめ

今回の活動報告会で参加者から寄せられたアンケートは、30 通であった。

１．共助研の活動報告について

活動報告については、コンサルタントの今後の方向性や社会貢献の一環として、良い事例であると感じている参加者が多く見受けられ、当会をアピールできる良い機会であったと思われる。しかし、今後の展開の難しさや業務としての取組みを考える上では、まだまだ課題が多くあるのではとの指摘を受けていることから、今後の展開についても、更なる検討の余地があると考えられる。

なお、活動内容の説明については、準備不足や資料不足及び説明の難解さなどを指摘する声が多く寄せられていることから、共助研としての活動範囲の拡大など、対外的にアピールを行っていくにあたっては、こうした意見を真摯に受け止めて改善を図っていく必要性を強く感じるものである。

２．講演会について

（１）東日本大震災報告について

震災報告については、九州からは遠隔地であり情報がメディアなどで中心であり、具体的なまちづくりにおける建設コンサルタントの役割や問題点など、技術者レベルの目線に立った現状報告に接する機会が少ないようで、参加者はかなり関心を持って聴講されていることが伺えた。なかには、報告時間が短いと指摘される参加者もあった。

今後は、九州において、なかなか情報が入りづらい遠隔地などのまちづくり事例や活動についても、積極的に情報収集を図り、対外的に情報発信を行っていくことが必要である。

（２）安藤氏の講演について

安藤氏の講演については、今、中山間地域が直面している問題に対し、多彩なアイデアを持って取り組んでいる事例を大変判り易く説明されたことなどにより、参加者の関心は非常に高く、大変興味を持つものであったことが推測され、好評を博していたことが伺える。

アンケート回答者の中には、安藤氏の講演内容から、建設コンサルタント業務へのフィードバックを考えている参加者も見受けられた。

（３）考察

机上の空論等ではなく、実際に現場で業務に従事している技術者や中山間地域で「新しい公共」として活動している方々の話を直に聴講できることは、参加者にとって非常に有意義なものであったと思われる。

今後とも、こうした試みは継続していくことが必要である。

３．パネルディスカッションについて

パネルディスカッションにおいて題目として捉えた「プロボノ」について、参加者は大変興味を持って聴講していることが伺える。また、新たなコンサルタントのあり方を見つけたとの回答を寄せている参加者も見受けられなど、概ね好評のパネルディスカッションであったと考えられる。

一方で、ストリーがありきたり、説明が長い、ディスカッションの時間が短いなどの指摘の挙がっており、こうした指摘事項については、今後の課題として捉え、改善していく必要がある。

４．今後実施してほしい報告会・勉強会について

中山間地域にとどまらず、都市内のコミュニティ再生や今回の現場報告の続編としての東北のまちづくり・区画整理・地域づくりなどの報告会や勉強会を望む声が比較的多く寄せられている。

今後は、こうした意見に対処して行く必要がある。

５．最後に

今回の報告会は、共助研設立以来、はじめて参加者が 100 名を越えた報告会であり、共助研の存在意義を、建設コンサルタントの技術者を初め、多くの方々に認識してもらうには大変良い機会であったと思える。また、報告会の内容についても、アンケート結果から概ね好評であり、成功裏に開催で来たのではないかと考えられる。

しかし、アンケートの回答の中には、厳しい指摘事項も含まれていることも事実であることから、現状に満足することなく、今後も更なる高みを目指して共助研の活動を推進することが必要である。

（共助研事務局　前田）

【参加者アンケート データ】

共助研・活動報告会
「～建設コンサルタントのもうひとつの可能性を探る～}
アンケート結果

１．【共助研の活動に対して、ご意見、ご要望をお聞かせください。】

・パワーポイントの完成度が低く、見づらい。
・配布資料が少ない。（報告会終了後に見直しても内容が思い出せない。）
・１つ１つの活動報告時間が短かい。
・前面画面内容の朗読なら、資料の目視でよい。
・活動の内容については良くやっていると思います。
・建設コンサルタントの…可能性を探る　→方向、goalが見えづらい。→個々のskill　upには役立つが、会社に対する貢献が見えない。（ボランティア、NPO活動？）
・社会貢献、地域貢献活動として色々な面で活動されていることがわかり、今後の一個人の取り組みとしてのあり方について考える場を頂き、大変参考になりました。
・事例（成功？）を紹介しいただいたが、展開がむずかしい（地域、地区によって特色が異なる）と感じた。
・引き続き頑張って下さい。
・都市と農山村の関わり方に対して、体験活動を提供することが重要と思った。
・共助研がその裾野をさらに広げる役割や活動を、今後も展開してほしいと思う。
・竹林活用の取り組みとして試みられている竹の活用方法について、非常に興味深く読ませて頂きました。肥料に関しては、今後様々な食物での試みをご紹介頂ければと思います。また、ネット販売への展開についても期待致します。
・九州の各地域の事例を聞けて、勉強になりました。（川であったり、まちであったり、竹林の利用だったり…）
・説明が分かりにくい。（準備不足）
・折角の活動が理解出来なかった。
・地域に密着した体験活動を活発に行動し、都市部では体験できない活動は共感できる。
・これからネットワークを通じて地域支援を継続していく必要があると思いました。
・大変おもしろい活動だと思います。しかし、現状では、自社業務に組みこむのは難しそうです。
・メンバーの方々は、よく判っていらっしゃる活動の様ですが、初めて聞き知った私どもにとっては、よく説明が判らなかった。具体の活動が、その具体の成果とあわせて示されない。また抽象的文言ばかりで、理解できなかった。何をしたいのか見えなかった。
・コンサルタントの新しい方向を考える参考になりました。
・これからの中間支援組織としてのあり方、これからの時代の流れでのとり組み方は参考になりました。
・建設コンサルタンとの今後の可能性を探る非常に有意義な活動だと思います。
・次の課題が見えて来た。
・活動内容がよく理解できました。
・通常業務以外に、大切な地域振興等に、助言、提案を頂いていることに感謝しています。
・地域と共助研がウィン・ウィンの関係による経済活動に発展するための具体的な行動が求められる。

２．【講演について、ご意見、ご感想をお聞かせ下さい。】

・配布資料がない。
・内容はまとめられていたが、資料通りの説明なら、資料配布でよい。
・震災被災地復興現地報告…コンサルの被災地での活動の有り方が理解できました。コンサルの地位向上につながる活動を期待したい。
・NPO　ひろしまね…都会人と田舎人の目線の違い　→建コンで考える（着目する）際のヒント、地域のプラットフォーム（営利事業、福祉事業も取りこむ考え方）の必要性等、傾聴することが多かった。
・勉強になりました。次回も参加したいと思います。
・事業による不公平感にはうなずいた。そんな問題があったのか。みなが復興ではないんだな。難しいですね。
・安藤氏の話は大変興味深く聞かせていただきました。苦労が組みとれました。
・大槌町の講演は貴重だった。都市計画的な観点からの現場の話はめったにきけない。
・大変勉強になりました。
・地域住民の意向で防潮堤の高さが従来と同様となった地域があることに驚いた。高齢化地域であろうにも関わらず、高台への避難を選択された住民の方々の意向をもっと聞きたいと思いました。
・地域で「小銭」が回る仕組みづくりを考えることの重要性を認識できました。
・復興まちづくりをそれぞれの立場からの意見を聞けてよかったです。地域のプラットホームの必要性。
・大槌　具体的な苦労をより多く聞かせてもらいたかった。
・大槌　我々遠方に住む人々が行える活動の提案があれば、より親身になれるのでは？
・ひろしまね　選択と集中の視点がいるのではないか。全ての地域が生き残るのは厳しい。
震災復興の進捗状況がわかりました。問題点があり長期にわたって町づくりが必要だと感じました。
・過疎地では人口構成や公共支援が不足すると危機的に落ち込んでいることがわかった。地方はどこでも高齢化している。止まるのか。
・生の話と意見が聞けてよかったと思います。
・①現地報告：現地の具体の状況がわかり易かった。現在進行形であることもよく理解できた。
・②「あるく、みる、きく、そして創る…」：判りやすく、実態をともなった活動であると思います。
・貴重なお話しばかりで、日頃考えが及ばないような場面に触れました。
・安藤さんのお話しの中で資金かせぎの視点からNPO、会社、共同団体へと変わってきた所が市民団体としてのあり方を考えさせられた。
・現場で実際動いている方の情報提供、迫力があり、参考になりました。逆に我々技術者に求められていることが明確になった。
・NPO、地域活性についてすごく参考になり同感する事も多い。
・安藤さんの講演は非常に参考になりました。
・知らない、多くの事案を発表していただき、大変参考になります。
・活動報告が時間の関係上、短かった。

３．【パネルディスカッションについて、ご意見、ご感想をお聞かせください。】

・ストーリーありきでは。
・長い解説には、資料が必要。
・建設コンサルタント→会社コンサルタント　建設コンサルのあり方として、発想（視点）はおもしろい。但し日本の役所の縦割の中で、どうfitさせるかが課題。
・プロボノ的中間支援型　→建設コンサルタント経営の一手段と成り得るか？社会的システム作り
・大変勉強になりました。
・参加者との交流も時間をとっていただきたい。
・有意義な話（時間）でした。
・時間が短いのでは
・建設コンサルタント→社会コンサルタント
・シンク&Doタンク
・プロボノ、お手伝い精神からの脱却
・ソフト施策のfeeを得る仕組みづくり。
・新たなコンサルタント業務のありかたを教えてもらいました。
・「社会」コンサルタントのフレーズが印象に残りました。
・ソフトとして提供する支援がお金にならない現状をどう変えるか、考える機会となりました。
・建設コンサルタントと地域とのかかわり方についての考え方が、よく分かりました。
・プロボノを今回初めて知りました。
・ディスカッションの時間が短い。（一部説明が長すぎる人の為？）
・地域支援活動としての動きはあるが、社会的な活動としてビジネスにつなげていかなければ、継続が難しく感じました。
・都市計画以外の地域プロジェクトが建設コンサルタントの仕事とは今まであまり思っていませんでした。大変興味深いディスカッションでした。
・非常に有意義で参考になった。コンサルの分野拡大は不可欠と認識できた。「分業」から「統合」の時代は、全産業でもいえる事象と考えられる。
・いろいろな立場からの可能性を探るお話し、提案を興味深く受け取れました。
・ドイツの仕組みのはしは参考になりました。
・技術者としての自分の、今後の可能性について参考になりました。
・人口が減っていく中のマネジメントが統合は、方向として良くわかる。
・共助研の役割についてよく理解できました。社会コンサルタントへ向けての取組みについて理解できました。今後取り組んでいきたいと思います。
・各地区で実施された事業を説明されて、これから、我々の地域でも、活用できることは、参考にして計画してみたいと思います。

４．【今後、共助研に実施してほしい報告会・勉強会があればお聞かせください。】

・事前資料（HPやCPDプログラムに掲載）の配布があればよい。
・30分以上の遅刻者は入室させない。
・（居眠り、びんぼうゆすり等）者の退場。
・「ひろしまね」はすごくよかった。話し方が上手で聞きやすい。
・今後も参加させて頂きます。
・今日の報告会が、このまま終わるのはもったいない。報道にも入ってほしかったと思う。共助研及び建コンの活動を一般にPRする機会を増やしたらいいと思う。フィールドを農山村だけでなく、都市内のコミュニティ再生などへも取り扱えないか？
・区画整理関連
・地域づくりの種々の可能性に関して勉強会を開いて頂きたいと思います。
・東北のまちづくり（今回から更新されたもの）の報告会を次回も実施してほしい。
・限界集落の実情報告
・ビジネスモデルのとしての話が聞いてみたいと思います。今の日本では政治家の利権をからめないと話は先に進まない気がします。
・今後とも活発な活動とその報告会を期待します。ありがとうございました。
・活動を通して収益事業がうまれ雇用もでき、なりたっている団体の取り組み等を知りたい。
・有意義な会議でした。
・このような活動報告等、機会をみて、開催して頂きたい。
・共助研の法人化は？

【編集後記】

●共助研の 3 年間の活動総括と建コン協会内での活動紹介を兼ねて、久しぶりに発表会でもしようかと、最初は気楽なイメージで発案したのが 4 月はじめ。

ただし、3 年間の活動アピールであれば、やはり、建設コンサルタントの有り様に一石を投じる気構えで取り組もうと、タイトルも”コンサルタントのもうひとつの可能性を探る”と大見得を切ることに。

それならば、これまでにも当会活動に貴重な指導・助言をいただいた小川先生に、是非アドバイスをいただこうと参加招請をさしあげ、続いて、講演もやろう、できればパネルディスカッションもと、内容が徐々に拡大して、いつの間にか一大イベントの様相へ。

7 月という時期も幸いしたのか、会場の半分が埋まればという当初の予想をはるかに超える勢いで参加応募の大波。果たして、その反響の大きさに応え得る内容が提供できるのかと、大きな不安を抱きながら報告会当日へ。

●と、このように、実に成り行き任せの準備を進め、しかも、小川先生には急遽他の委員会と日程が重なるというアクシデントも発生し、当日のパネルディスカッションは、ほぼぶっつけ本番で開始、というのが舞台裏の実情でした。

今こうして当日の記録を編集してみますと、行間から当日のドタバタぶりがすけてみえるのですが、さすがに活字化されてみると、この 3 時間がいかにもまとまりのあるシンポジウムとして費やされたようにみえて、とりあえずは胸をなでおろしています。

●この報告会に向けて貴重な時間を割き準備していただくとともに、講演及びパネルディスカッションにおいて多くの貴重なご示唆をいただきました、小川先生、安藤さん、和泉さん、平野さんには、心よりお礼申し上げます。

●安藤さんの講演からは、4 年前に当会の準備段階で教わった、言わば我々の原点となる考え方と方法論を再確認させていただき、さらに、永年の地域支援活動体験を通して培われた活動当事者としての気構え、発想、行動、さらにそれらの成果の敷衍化等々、この分野での先駆者の実像をしっかりと目に耳に刻むことができました。

●小川先生の巧みなリードによるパネルディスカッションでは、パネラーの方々が胸に貯めた貴重な意見をうまく引き出していただくとともに（ひとり長々としゃべり顰蹙を買ったパネラーもいましたが）、短時間でのディスカッションを総括して、「統合」というキーワードでコンサルタントが目指すべき方向性のひとつを喝破されたそのご高見に、毎度のことながら感服させていただきました。

●前日からおおむね 1 日かけて大槌町から駆けつけていただき、いつもながらの冷静かつ論理的な口調で、現地での震災復興業務を熱く報告していただいた平井さん。1 年ぶりの福岡帰還ながら 1 日足らずの滞在だったようで、本当にお疲れさまでした。これからも長く続く復興業務の円滑な遂行と、ご本人のご健勝を強く祈念いたします。

●また、当日会場を埋めていただいた 100 名を超える参加者の皆様には、3 時間の長丁場ながら最後まで聴講いただくとともに、アンケートにおいて多くの貴重なご意見、ご感想さらに当会への励ましのお言葉を賜りましたこと、厚くお礼申しあげます。

●当日の会場運営は、「共助」の名に恥じない協働作業でスムーズに運びました。閉会ご挨拶をいただきました建コン協会技術部会の川瀬副部会長、第 1 部活動報告で報告していただいた森脇さん、木寺さん、岑さん、山本さん、波多野さんを始めとして、総合司会を務めていただいた前田さん、さらに会場設営・受付や録音、録画を担当していただいた当会会員及び建コン協会「環境・都市等技術委員会」の委員の方々には厚くお礼申し上げます。

最後に、当日はあいにくの欠席となりましたが、準備期間を通して奔走していただき、また素敵な当会紹介パネル（本報告書の表紙）をデザインしていただいた中川さんに、心よりお礼申し上げます。この秋には、健康でかわいいベイビーを無事出産されるよう祈りつつ。

（共助研事務局　波木）

共助研・活動報告会に関する報告書

作成日　平成２４年　８月

作成者　九州 郷づくり共助ネットワーク研究会（(一社)建設コンサルタンツ協会九州支部内))

〒812-0013　福岡市博多区博多駅東 1-13-9　博多駅東 113 ビル　8 階

TEL 092-434-4340　　FAX 092-434-4342

共助研ＨＰ：　http://www.jcca.or.jp/kyokai/kyushu/q-sato/

九州 郷づくり共助ネットワーク研究会